島根の記憶

松江大橋

その2

⑫

仮橋げた音 陽気なリズム

青年が指さす先は、宍道湖に沈む夕日だろうか。学生帽に、太ひもを結わえた羽織、はかま姿の旧制松江高（現島根大）の学生二人が木橋でたたずむ。昭和初期、同校でドイツ語を教えたフリッツ・カルシュが残したこの写真は、当時架け替えが進む松江大橋の仮橋のようだ。

学生たちは、「ぼくり」と呼ばれる厚歯の高げたを履き、木橋を歩くとカラカラ鳴った。その約四十五年前、来日間もない小泉八雲に「どうしても忘れられぬ」と言わしめた〝松江の音〟だった。

一八九〇年、松江に到着し、大橋川北詰の旅館に投宿した八雲が見たのは、建設中の第十五代松江大橋と、横で「く」の字に曲がった仮橋だった。十五代は初の洋式橋として翌春完成したが、近代的な鉄けたや白ペンキ塗りが不評を招いた。

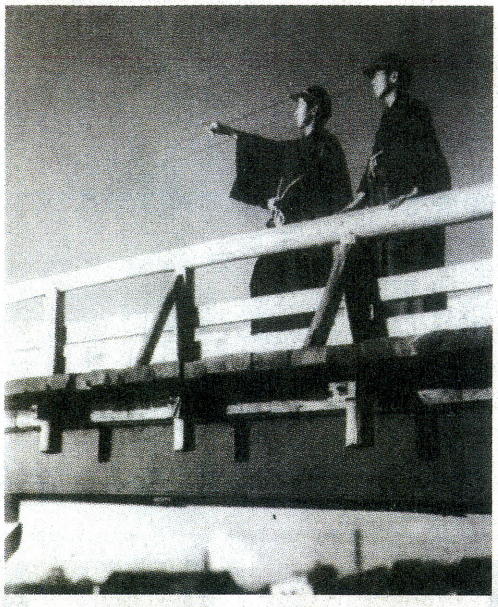
一方、仮橋は「あまたの橋脚に支えられた、無毒のムカデのようではるかに美しい」と愛で、その上で鳴るげたの音をこう評した。

「速くて陽気で調子よく、まるで大舞踏会の足音だ」

この音を確かめる試みが今夏、ひ孫の県立島根女子短大助教授、小泉凡さん(43)の呼びかけで実現した。市内の小中学生十四人が、十年前に木橋として復元された松江城東側の堀川にかかる北惣門橋をげた履きで歩いたり走ったりし、「歩くとカランコロン、走るとカタッカタッと心が和む、透き通った音がする」「ヘルン(八雲)さんの気持ちが分かった」などと感想を寄せた。凡さんは「視覚だけじゃなく、五感を磨いてほしくて」。

江戸時代初めから約三百年間、橋北、橋南地区を一本で結んだ松江大橋。松江市大橋川・大規模プロジェクト対策課長の渡部修さん(56)は言う。

「対岸を『あっち町』、自分たちの住む方は『こっち町』と、ともすれば隣町より遠い感覚の川の北と南を、にぎやかなげたの音がつないできたんですね」



木橋にたたずむ羽織はかま姿の学生（若松秀俊・東京医科歯科大大学院教授提供）

宍道湖に沈む夕日に映える松江大橋